
報告者名	大沼 知	被調査者生年	1947年(男)
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	民宿経営
補助調査者	大沼 知		

民宿業再開の経緯

震災を受けてから最初はどうかしらいいかわからず、避難所に居ながら迷っていたが、古い付き合いのお客さん達や1回くらいしか来たことのなかったお客さんなど色々な人達から支援や民宿再開を望む声をもらい、「ありがたい」という感謝の気持ちから再開を決意した。

自宅兼民宿だった建物の被害状況は、1階部分は浸水したが2階までは被害が出なかった。被害の程度は水の高さで決まるらしく、2メートルくらいあがっていれば全壊扱いになる。この民宿では3メートルくらいあがったそうで、全壊扱いとなった。しかし1階部分は昭和57、58年ごろに建て替えており、40年近く経っているが鉄骨を入れていたので建物自体の流失は避けられた。

建物の被害の状況を見て、他のところと比べると比較的軽いものと思い、「これは再開できる」と感じていたが、工事に入った大工などからは見た目以上に被害はあり難しいと言われた。だがそれでも無理だなと思ってあきらめることもなかった。

建物の解体工事は2012年1月4日から始め、1月の末には大工が入ってリフォーム工事が始まった。5月のゴールデンウィークあたりから大工2人で作業にあたり、夏前あたりに新しい民宿が完成した。被災前は自宅兼民宿であったが、現在は民宿を仕事場として活用し、住むところは月浜地区仮設住宅として分けている。

民宿再開後初めての客入りは2012年8月13日で、本当は7月ごろには始められると思っていたが、忙しさを余裕がなく、特に明確に日にちを決めて始めようという気持ちはなかった。お客さんに礼状などを出して呼び込みをしてからの再開をと考えていたが、口コミのようなかたちで情報は広まっており、気付いたら再開にこぎつけていた。

とにかく民宿の再開のために震災以降毎日忙しく、再開した現在も経営を軌道に乗せるために忙しいとのこと。再開にあたっての苦労は特に感じなかったと話しており、むしろ忙しすぎて苦労を感じる暇もなかったというほどであった。

月浜での今後の民宿経営と生活

話者には息子さんが1人おり、息子さんは現在松島に出ていて、ホテル関係の仕事に従事している。息子さん自身は月浜での民宿を継ぎたいという思いがあるらしく、話者もゆくゆく息子さんに継いで世代交代を考えている。そのためにも今後は息子さんにも民宿経営のイロハを教えていかなければと考えている。しかし現在の月浜で民宿を続けるのは厳しいとも思っており、また自身が所有している田畑（津波の影響を受けなかった部分もある）の世話をしなければいけないなど忙しさは当面続くだろうと感じている。

上にも記したが、話者は現在、基本的に住居は仮設住宅であり、民宿は仕事場として使用（宿泊客がいるときは民宿にいる）していることから、以前の住居一体の民宿ではない。よって高台移転が計画通りに進めばゆくゆくは移転先に自宅を構え、完全に居住空間を民宿と分離した生活になるだろうと思っているが、高台移転の話がまだ先行き不透明な状況であり、民宿の改装にもお金を掛けているためまだはっきりとしたことは言えないという。高台移転に関しては、月浜でも移転先の用地はだいたい目途はたっているものの、未だ最終決定には至っていない。話

者もまだ詳しい経緯はわからないという。

今回の民宿改装に関して、補助金などは現時点では貰っておらず、自身の資金で行った。補助金などの存在は知っており、後で申請して受け取るようである。ただ補助金が出たとしても上限額が1,000万円なので、その金額では全てカバーできるわけではないという。

震災前の生業の様子

メインの仕事は民宿で、昭和50年頃に開始した。民宿について、最初は県の方から奨励があったらしい。当初は設備や規制が緩く、夏季に収入が見込めるため地域を挙げてやり始めた。民宿を始める前は海苔養殖をやっていて、しばらくは民宿と並行して行っていたが、後継者がおらず養殖はやめた。

畑は持っているが小さいため自家消費程度で出荷などはしていない。漁業も刺網漁をしているが、これも出荷せずに民宿の料理に出している。夏場はモグリ（潜り）といって磯漁をしている。磯漁をするときは口開けといってみんなで集まって、今日は波が高いから駄目であるとか、今日は波がいいからやるといった具合に相談をして行う。ゆえに勝手に行くとまずいが、それに伴う罰則などについては聞くことができなかった。田んぼもあり、米はいくらか出荷していた。畑や田んぼ、漁でとれるものは基本的には自家消費という色合いが強く、メインの仕事は民宿業というかたちになる。